思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。

（1コリント　13・4〜8）

この聖句に、私は号泣（ごうきゅう）しました。四十年間捜し求めていたお方、イエス様にお会いしたのです。

愛され、心配され、赦されている。自分を変えるための努力もいらない、ただそのままイエス様のところへ行けば抱きしめてくださる。うれし涙があとからあとからあふれ、冷たい風が吹き抜ける心の中の暗い穴もなくなりました。

それからは、毎週日曜日にキリスト集会に集うようになり、いつも幸せな心で帰宅して、喜びでいっぱいでした。ふと気づくと自分を大好きになっていました。イエス様は私を愛し、私のためにすべてを、いのちまでも捨てられた。それなのに私は自分のあそこが嫌（いや）、ここが憎いと文句を言っていた、主の作品であるのに。イエス様ごめんなさい。そしてありがとう。主が側（そば）においてくださった家族、友人、知人すべてが大切になりました。

一九九七年春、「あなたの家を整理せよ。」（イザヤ38・1）、何をしていても響いてくるこのみことばに重い腰を上げ、在住していた北九州の家にあった家具、衣類、食器、本、アルバム、寝具などのうち、二人分以上の品のすべてと、思い出にしがみついて手放せなかった品もすべて処分しました。

その後に待っていたのは予想もしなかった体験でした。六月十三日の早朝、夫と私は車で家を出発、長野県御代田に向かいました。約千キロを走って夕方六時半ごろ着く予定でした。広島県福山のサービスエリアで朝食と休憩を、と進入したとき、車はスピードを落とすどころか増していったのです。「ブレーキがわからない」と夫の声。車は朝食時間で混雑していた駐車場に突っ込み、七台の車にぶつかり、最後に大型トラックの後部に激突して白煙が噴き出しました。夫はドアを開け飛び出し、私に「早く出ろ」と怒鳴っています。私は全身の機能が働きません。数人の方の協力で外に運び出していただきました。そんな状況の中で私は「イエス様、私は生きています。感謝します。主はすばらしい。ハレルヤ」と心の中で叫んでいました。七台もの車が被害を受けたのに負傷したのは、首から下が全身マヒになった私だけ、主人はムチ打ちからも守られました。

病院では様々な検査の後、ドリルで頭骨の四ヶ所に穴が開けられ、牽引（けんいん）治療が始まりました。頚椎（けいつい）の第三と第七が脱臼（だっきゅう）したとのことでした。治療が始まるまでの三時間半、今まで経験したことのない激痛に苦しみました。溶鉱炉で溶けた真っ赤な鉄を頭、首、背に流し込まれる思いでした。「主よ、助けて」と叫ぶと、聖歌229番「おどろくばかりの」が静かに流れました。MRI（画像診断装置）で検査を受ける苦しさの中でも賛美が流れ、がんばらなくても良いとの御声があり、目は開けられないのに部屋が輝いていて、天国の入り口だろうか、と思いました。苦しみや痛みが厳しくなるとイエス様が覆（おお）ってくださる、決して一人ではないのだということを体験しました。すばらしい、すばらしい時でした。

二ヶ月が過ぎ、牽引を外（はず）したら再び頚椎の二ヶ所で骨がずれて、左半身がしびれて痛みが出ました。そして、広島の安佐市民病院で手術を受けるしかない、と医師から説明された時、私はイエス様を見失いました。

この二ヶ月の苦しみと痛み、もう一生自分の足で歩くことができないかもしれないという不安、手術への恐怖。真っ暗闇の穴の中にぐんぐん引きずり込まれ

て息もできません。イエス・キリストがまことの神なら、こんなことは起こらないはずだ。私が何をしたというのか。ただキリストを信じ、喜んですべてを受け入れた、それなのに一度は全マヒから回復を与えて喜ばせ、もう一度全マヒにするのか。夜の闇の中、私はイエス様をののしり続けました。一週間苦しみました。

主はみことばで答えられました。

あなたの生まれは、あなたが生まれた日に、へその緒を切る者もなく、水で洗ってきよめる者もなく、塩でこする者もなく、布で包んでくれる者もいなかった。だれもあなたを惜しまず、これらの事の一つでもあなたにしてやって、あなたにあわれみをかけようともしなかった。

あなたの生まれた日に、あなたはきらわれて、野原に捨てられた。わたしがあなたのそばを通りかかったとき、あなたが自分の血の中でもがいているのを見て、血に染まっているあなたに、「生きよ。」と言い、血に染まっているあなたに、くり返して、「生きよ。」と言った。

（エゼキエル　16・4〜6）

イエス様はこのみことばを通して悔い改めに導いてくださり、また私の内なるイエス様に気付かずに偶像を内在させ、聖なるイエス様とごちゃまぜにしていた大きな罪を示してくださり、それでも赦し、愛し、「生きよ」と命じてくださいました。夫との結婚生活も五十四年、夫が主に招かれ受け入れてからは二十年になりますが、一日一日が主の喜びと平安な日々であったことを感謝しています。

清水総子

一九四〇年十月、東京都世田谷区生まれ。鴎友学園高等学校卒業。老人ホーム白寿荘に十年勤務。夫・洋一。娘二人。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます

神田　啓子



中央が啓子さん、みなさんと

私は一九五〇年、島根県出雲市で三人姉妹の次女として生まれました。四十年間はクリスチャンの知人もなく、教会に行ったこともなく、聖書を読んだこともなく、まったくイエス様とは無縁な生活をしていました。一九九〇年の初めにウォッチマン・ニーの「十二かご」という信仰書を読んだのがきっかけで聖書を読むようになり、聖書のみことばを通してイエス様と出会い、救われました。救われた経緯については「主は生きておられる10号、二〇〇五年」に証が載っています。一九九〇年の秋には集会に導かれました。

私はずっと、救われるまで福音に触れたことがなかったと思っていました。しかし、救われて、聖書のみことば「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」（ローマ　10・18）を読んで、小学生の夏休みに母の実家の蔵の中で、母が幼い時に亡くなった祖父の蔵書の中に聖書物語をみつけて、読んだことを思い出しました。マルタとマリヤの話をよく

覚えています。マリヤのようにイエス様の足元で話を聞きたいと思ったことも思い出しました。祖父がイエス様に出会っていたかどうかはわかりませんが、主のみことばは島根県の山奥まで届いていたのだと驚嘆しました。

集会に集うようになって、自然に家族や友人や職場の同僚の救いを祈るようになりました。妹は当時ニューヨークに住んでいました。集会の本や聖書を送りましたが、すべて「積んどく」で読まれることはなかったようです。一九九五年頃からベック兄姉はじめ数名の兄弟姉妹からなる小グループでの北米伝道旅行が始まりました。一週間くらいの日程で北米を西海岸から東海岸へ、あるいはその逆のコースで北米在住の兄弟姉妹の所で家庭集会や福音集会をしながら移動するものでした。私も参加させていただきました。ある時、妹は家庭集会に参加してベック兄と個人的に話す機会をいただきました。「その時に祈ったよ」とベック兄はおっしゃいましたが、日前の妹の状態しか見ていない私は、妹が適当に調子をあわせたのではないかという疑いを持っていました。また、その時に妹と喧嘩してしまい、帰りの空港の待合室で飛行機を見ながら、「何のためにここまで来たのだろう」と惨めな気持ちになったことを鮮明に覚えています。妹があのような状態では福音を携えて行っても無駄ではと思っていた時に、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒 16・31)というみことばが新しい光をもって心の中に入りこんできました。私がイエス様を信じるなら、妹が何をしようが、どんな状態であろうがイエス様が救ってくださる。問題は私の心、私のイエス様に対する信頼にかかっているということがわかったのです。それからは、妹がどのような状態でも気にならなくなりました。

それから二年くらい経過して、二〇〇一年九月十一日、ニューヨークのテロ事件が起こりました。妹とは電

話もメールも不通になりました。私のぼんやりとした記憶では、妹はあのビルの近く、ないしはビルの中で仕事しているはずでした。ビルから落ちていく人の姿をテレビで見ながら、どうすることもできない状態の中で、私は不思議と平安な気持ちでした。妹はイエス様について既に、ベック兄から聞いているのだから、最期の時にはイエス様に祈るだろうと思ったからです。この世の命が終わる前に妹が救われているなら、何の心配もないという思いでした。それでもイエス様に祈りました。「もし、妹があの中にいなくて助かったのなら、あなた様に仕えるものとしてください」という祈りでした。それだけがその時の私の願いでした。しばらくして、妹から「天の助けで助かった。娘の学校の面談で、半日休みを取って、いつも通りの時間に出勤しなかったために巻き込まれずに済んだ」というメールが来ました。二つ目のビルの下は地下鉄の駅になっていて平常なら、通勤時間帯なのでそこにいたそうです。

10人の証し

Unser HERR lebt

その後、妹は娘の病気を通して、永遠の滅びから救われました。妹の夫は九月十一日のテロ後、仕事を変え、夫婦でカリフォルニアに移転しました。その少し前に娘が発病し、私のところにも妹から相談の電話やメールがありました。しかし、具体的な助けを与えることはできませんでした。

二〇〇二年の四月にロス喜びの集いがあり、私も参加しました。妹はまだ新しい仕事についておらず、喜びの集いのあったホテルは妹の住居まで車で数分の距離にありました。そのため、妹は喜びの集いに全部参加することができました。食事も兄弟姉妹と一緒でした。本当に主の大いなる憐みと恵みの時でした。妹は私のアドバイスが欲しいようで二人になりたがっていましたが、私は頼れるお方はイエス様しかないことを伝えました。そして、イエス様に祈るように言いました。妹に何を祈ってもいい、どのように祈ってもいい、ただ、祈る相手はイエス様だとはっきり意識して

祈るように教えました。二人で祈る時を持ちました。私が祈ろうとした時に私の心にはっきりと「人は自分の兄弟をも買い戻すことはできない。自分の身のしろ金を神に払うことはできない。たましいの贖いしろは、高価であり、永久にあきらめなくてはならない。」(詩篇 49・7〜8)というみことばが聞こえました。私は恥ずかしいような気持になり、「主よ、そのとおりです」と申し上げ、自然と頭が下がり、引き続いて妹を憐れんでくださるように祈ったと思います。その後、もう一度、妹にイエス様に向かって祈るように念をおして、妹が祈るのを待ちました。私はその時、おそらく妹は娘の病気を治してくださいと祈ると思っていました。そして、それでもいいと思っていました。ところが、妹は「わがままでした。ごめんなさい」という意味の言葉を三回言っただけでした。妹が悔い改めの祈りをしたことに私は腰を抜かすほど驚きました。そして、目の前にまったく別人、生まれ変わった人がいるのに気づき、更にびっくりしました。

風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。
(ヨハネ 3・8)

このみことばをそのまま体験させていただきました。その日の昼食後に、ベック兄は妹に別室で話してくださいました。ベック兄の後をついていく妹は羊のようでした。

人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。
(ヨハネ 3・27)

この驚くばかりの恵みに舞い上がってしまった私は、主にある兄弟姉妹も肉親の姉も区別がつかなくなってしまい、妹が救われた喜ばしい知らせを肉親の姉に知らせようと、帰国後すぐに出雲にいる姉を訪ねました。そこで、喜ばず、不機嫌になる姉に業を煮やしてあなたは間違っているとばかり、立場も忘れて偉そうに説教してしまいました。挙句の果てに、「イエス様のほかに、本当に価値のあるものなど何もない。あなたは子供にこの本当に価値のあるものを伝えないで何を残すつもりなのか」と詰問してしまいました。姉は激怒しました。その後になって我に返った私は、姉が未信者であることを思い出しました。しばらくは姉とも絶交状態でしたが、徐々に音信も回復し、二〇一五年の夏に妹夫婦と姪(三人とも救われました)が出雲の姉を訪ねた時に、姉が妹に「啓ちゃんはイエス様信じて良かった」と言ったそうです。

妹の夫はすぐに救われて受洗しました。姪は病気がひどく、喜びの集いの時も姉妹方ともお話しができず、自分の意思を伝えることもできませんでした。

私はそのような状態の姪を見て心が痛み、「妹が救われるためにどうして、姪が病気にならなければならないのだろう」と納得がいきませんでした。頭では「イエス様にゆだねて」とか「主に従って」と思いながら、心の底では、しっかりと、自分の思い、自分の考えという自我が主導権を握っていました。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。
(イザヤ 55・8〜9)

私たちは真実でなくても、彼(イエス様)は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。
(2テモテ 2・13)

10 人の証し

Unser HERR lebt

彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。
（ローマ　10・11）

これらのみことばを始め多くのみことばをもって、主は私を戒め、教え諭し、慰め、励まし、導いてくださいました。主は徐々に、「私に何がわかりましょう。主よ、あなたはすべてをご存じであり、最善をなしてくださるお方です」と心から言える者に、私を変えてくださいました。そして、姪は主のみことばのお約束と恵み、兄弟姉妹の心からのお祈りを頂き、集会に参加して姉妹方と話し、姉妹方の証を聴くことができるように次第に変えられていきました。そして、祈るようになり、自分から受洗したいと言って、受洗の恵みにも与りました。妹の息子は現在、東京に住んでいて、吉祥寺集会の礼拝に誘うと夫婦で時々来てくれます。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒　16・31）

本当に素晴らしいお約束のみことばです。

神田啓子　（かんだけいこ）
一九五〇年島根県生まれ。神門小、河南中、出雲高校、山口大学医学部卒。
阪大大学院医学研究科博士課程修了。茅ヶ崎新北陵病院勤務。
妹夫婦　板垣　知夫・輝子（いたがきともお・てるこ）、
姪　北里　玲（きたざとれい）
姉夫婦　後長　滋・敏子（ごちょうしげる・としこ）
甥夫婦　北里　勇気・ソフィア（きたざとゆうき・ソフィア）

悪魔との闘いの勝利者イエス様

板垣　知夫



左から娘の北里玲さん、知夫さん、妻の輝子さん

今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。
（マタイ　4・8～11）

これはイエス様が荒野で悪魔の誘惑に打ち勝った瞬間です。イエス様は私にも悪魔への勝利をくださいました。

私は一九六四年、山形県鶴岡市で生まれました。父親は中学の国語教師で小説家でもあり、本を何冊か出していました。真面目な人で国語教育では地域の教員のリーダー的存在であり、人望も厚い人でした。母は印刷工場で働き家計を助けていました。ご

く一般的な共働きの一家の次男でした。

私は、小学生の頃からスポーツ万能で成績も良く、端から見たら優等生でした。父親が地域の教育界で有名でしたので、周りからは「板垣先生の子」と呼ばれていました。ところが、なぜかそんな自分がイヤで、陰では万引きや喫煙をしたりしてスリルを求めていました。小学生ながら表向きには優等生、陰では悪事を働く者でした。中学時代も、不良生徒との交際や窃盗品の売買、果ては年老いてもうろくした祖母の年金を盗み取るなど悪事を重ね、卒業と同時に地域で一番の進学高校にも入学できました。もちろん、高校でも同様の悪事は続きました。悪魔はこうして「見つからなければ大丈夫」とささやき、私を操ってきました。

祖父は大正時代にアメリカに留学した経験を持っていました。弁護士になる夢を持っていたそうですが、政治状況や日本人排斥運動の影響で夢半ばにして帰国せざるを得なかったそうです。祖父のアメリカでの友人がクリスマスになると板垣家にプレゼントを送ってきました。小さな頃からそれらの物に触れていた私はいつしか、アメリカで暮らしたいという夢を持ち始めました。高校卒業後東京の大学に進学しましたが、大学生活二年目に両親の反対を振り切り、大学を辞めて渡米することを決めました。祖父のアメリカでの古い写真一枚とカバンひとつを持ち、単身ニューヨークに渡りました。一九八五年のことでした。

ニューヨークでは当初様々な苦労はありましたが、運よくある旅行会社の社長さんに巡り合うことができ、その方の会社で働き始めました。社長さん一家は、家族同様に面倒を見てくれました。それに応えるように私も一生懸命働き、数年すると生活はなんとか落ち着くようになりました。しかし日本での窮屈な思いが嫌（いや）で飛び出してきた私には、次第に「自由」という翼が背中に生え、また悪魔と共に

歩むようになったのです。仕事は真面目で信頼は得ていたものの、私生活となると遊興、酩酊、好色などの快楽にふける毎日でした。ここでも表向きは優等生で陰では悪事を働いていたのです。社長さん一家も含めたくさんの友人、出会った人々を偽（いつわ）りや裏切りで傷つけました。次のみことばが聖書にあることなど知る由（よし）もありませんでした。

若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。

（伝道者　11・9）

何年かすると、申請していた永住権のための面接が日本のアメリカ大使館である旨の通知がきました。簡単にもらえるものと思って喜んで帰国しましたが、書類不備と言われアメリカへの再入国を禁止されたのです。ショックで目の前が真っ暗になりました。当分山形の実家で暮らすことになりました。毎日が人生のどん底に落とされたような、暗く辛い日々でした。今思えばこれは主のご計画で、高慢になっていた私を主が砕いてくださったのです。しかし、アメリカ永住権を諦（あきら）め切れなかった私は、弁護士を通じ翌年再申請の手続きをしました。運よく一年ほどで面接となり、永住権を手に入れました。そして一九九五年、永住権を持って再度渡米しました。

渡米後すぐに、日本の大手の旅行会社のニューヨーク支社での仕事を得ました。そこでの仕事は大きな仕事ばかりでやりがいがありました。ニューヨークで、世界的に有名な様々な施設を借り切ってのイベントや数百人単位のコンベンションの手配など莫大な予算の仕事ばかりでした。夢中で仕事をこなし、次から次へと大きなプロジェクトを成功させました。数年す

ると昇進し、役職にも就くようになり、順風満帆のように見えました。しかしもともと短気で人付き合いの苦手な私は、社内や取引先との人間関係は必ずしもよいものではありませんでした。ストレスで常に怒りに溢(あふ)れ、攻撃的で傲慢(ごうまん)な人間になっていました。

怒りをおそくする者は英知を増し、気の短い者は愚かさを増す。穏やかな心は、からだのいのち。激しい思いは骨をむしばむ。（箴言　14・29〜30）

怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。（詩篇　37・8）

そんな時、同じ職場にいた現在の妻である輝子（てるこ）と知り合いました。彼女には当時高校生の息子と中学生の娘がいましたが、彼女は離婚し、我々は一九九九年四月に結婚しました。我々は幸せでしたが、娘は両親の離婚も影響したのか、統合失調症を発症しました。

そんな状況の中、二〇〇一年九月十一日、同時多発テロ事件が起きました。私はいつものように仕事に出かけ、マンハッタンの真ん中にある高層ビルのオフィスに着くとすぐに事件を知り、会社の会議室の窓からそのショッキングな一部始終を目撃しました。仕事柄何度も登ったことのある世界貿易センタービルでした。ビルが崩れ落ちた時、我に帰り事件現場近くで働いている妻のことを思い出しました。毎日妻が、事件現場真下の駅で地下鉄を降り、オフィスに向かう時間がちょうどこの時間でした。後でわかったのですが、妻はこの日、娘の学校に呼び出されて出勤していなかったのです。その時私は、神様が妻を救ってくださったと思いました。

わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたこともなく、御姿を見たこともありません。また、そのみことばをあなたがたのうちにとどめてもいません。父が遣わした者をあなたがたが信じないからです。（ヨハネ　5・37〜38）

「君は今日限りで解雇です」。支社長に呼び出され解雇の通告を受けたのは、その一ヶ月後でした。大きな仕事の数々を成功させてきた、そんな自負を抱えて働いていた私には理解できずショックでした。ニューヨークのあらゆる産業がテロ事件の影響で落ち込む中、私の勤める会社も例外ではありませんでした。リストラなんて自分には関係のないことだと思っていた私は納得できず怒りに満ちあふれました。今思えば、これも私を砕くための主のご計画だったのです。

妻はその後も同じ職場で働いていましたが、精神的に辛かったようです。そしてニューヨークに住む意欲がなくなった我々は、テロ事件から四ヶ月後、ロサンゼルスに移住して人生を一からやり直すことにしました。

数ヶ月後、ニューヨークに残してきた妻の娘の統合失調症が悪化し、入院したとの知らせがありました。妻はすぐにニューヨークに行きましたが、娘の状態に驚き、ロスに連れて来て三人で住むことを私に提案しました。私は迷いましたが承諾し、妻の娘の北里玲（きたざと れい）を受け入れることにしました。

ロサンゼルスでも娘は精神病院に入院し、退院後も強い薬を処方され副作用にも苦しみました。私は当時まだ定職に就いておらず、生活は不安定でした。そんな時、妻の姉にあたる集会の神田啓子姉妹が北米喜びの集いでロスアンゼルスを訪れました。義姉の紹介でベック兄にも会い、イエス様のお話を聞きました。正直ベックさんのお話は、私には何も響かなかったように覚えています。しかし妻は導かれ、翌二〇

○二年サンフランシスコでの喜びの集いで洗礼を受けました。

私は、義姉がくれた聖書を読んでみようと開くようになり、それまでの人生を振り返り、自分を客観的に見ることができました。悩んできた人間関係や自分のあり方についてすべての答えが聖書には書いてありました。聖書は二千年以上も前から現代のことを預言し、人間は昔も今も何も変わっていないことに気付きました。そんな聖書のすばらしさに感動を覚え、聖書を中心とし教会制度を持たないキリスト集会の意向に賛同し、何の抵抗もなく二〇〇三年ロサンゼルス喜びの集いで受洗の恵みに与りました。しかし、正直なところ聖書のすばらしさを認めただけであって、本当の意味でイエス様に出会った喜びはありませんでした。礼拝には参加するが、形式的で義務的な祈りをする、そのような生活が続きました。

わたしに向かって、「主よ、主よ。」と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。（マタイ　7・21）

その後は現在の職にも就くことができ、生活も安定してきました。娘も薬による副作用に悩むものの少しずつ安定し落ち着き、二〇〇七年には洗礼を受け、晴れて家族全員が救われました。毎日の生活は、家族の祈りで始まり祈りで終わるものとなりました。苦難の末ようやく少し安定した生活ができるようになり主に感謝しました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

しかし、恵みを受けても、毎日の生活では感謝やみことばを忘れ、自らの力で歩んでしまい、うわべだけの祈りを繰り返す者でした。そのような油断した生活が数年続くと、いつしか私は、悪魔のささやきに耳を傾け始めたのです。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。（1ペテロ　5・8）

まさに、このみことばにあるように、私は悪魔に身を委ねてしまい、女性問題で罪を犯してしまいました。苦楽を共にしてきた妻を欺き裏切ったのです。妻はそのことを知り激しく傷つき、離婚の危機を迎えました。幾度となく口論の度、あたかも私の中には妻や病気の娘を捨てて自由に生きていくことをそそのかす悪魔と、十字架を背負って生きていくことを応援してくださるイエス様とが、いるような状態でした。私は祈りました。おそらく洗礼を受けてからの祈りの中で一番真剣な祈りだったと思います。そして私はイエス様と歩む道を選びました。イエス様の勝利の瞬間でした。妻も私が悔い改める道を歩むことを受け入れてくれ、夫婦でまた新たに歩み始めることができました。イエス様がなければ我々夫婦はそれぞれの道を歩んでいたと思います。すべてをご存知のイエス様には何も隠しおおせることなどできないのです。

おおいかぶされているもので、現わされないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。（ルカ　12・2）

私はこのことを通して本当の信仰へと導かれまし

た。悪魔に勝てるのはイエス様しかいないことを、身をもって知ることができました。イエス様はこうして私のこれまでのすべての罪を明るみに出してくださり、その悔い改めも同時に受け入れてくださいました。そして新しい人間に変えてくださいました。振り返ると、私が本当にイエス様に出会うために、私を救いの計画のもとに置いてくださり、憐れんで導いてくださっていたことがわかったのです。イエス様は私の罪のために身代わりとなり十字架にかけられ、そして私を救うために、よみがえられたのです。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ　3・3）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・9）

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。（2コリント　5・21）

二〇一四年の秋、ほぼ同時に私は両親を亡くしました。父も母も未信者でしたが曲がったことが嫌いで、誠実で尊敬されていました。私は小さな頃から兄とは真逆の性格でけんかばかりしていましたから、大人になってからも疎遠な状態でしたが、両親の死は我々兄弟を繋（つな）いでくれました。これを機会に私の家族と兄の家族が交流するようにもなりました。イエス様が両親の死を用いて家族の大切さを教えてくれたと感じました。兄とその家族の救いを祈っています。

私の幼い頃からの悪事の数々や自由奔放な生き方

で、両親にはたくさんの迷惑をかけました。それでも両親はいつも私を信じ支えてくれました。その両親に謝ることさえできず、ましてイエス様のことを伝えることなどできませんでした。でも、「信じなさい、そうすればあなたもあなたの家族も救われます」とのみことばに信頼して、イエス様におゆだねしています。イエス様は、私のような罪人でも悔い改めて天の御国に入る望みをくださいました。愛する家族と両親に天の御国で再会することが今は私の生きがいです。私には冒頭にあるみことばの力強いイエス様がいますから、勝利を確信し日々歩むことができます。

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。（ヤコブ　4・7〜8）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

板垣知夫（いたがき　ともお）
一九六四年　山形県鶴岡市生まれ
鶴岡第五小学校卒、鶴岡第二中学校卒、鶴岡南高校卒、獨協大学外国語学部中退
ハセガワトラベル・ニューヨーク社、ＪＴＢニューヨーク支社などを経て現在、郵船ロジスティックス　ロスアンゼルス支社勤務
妻・輝子、継娘・北里玲

イエス様の尽きぬ愛に感謝

板垣　輝子



前列左から娘の北里玲さん、輝子さん、夫の知夫さん、姉の神田啓子さん、みなさんと

私は一九五三年三月に島根県出雲市で祖父母、両親と姉二人の末っ子として生まれました。自分の主張を通そうとするわがままで、そのくせ内弁慶（うちべんけい）な子でした。根はまじめで、規律をきちんと守り、学校でも職場でも皆にとても可愛（かわい）がられるところがありました。

物心がついた時からなぜか、死に対する恐怖心が強まり、病気をするたびに母に「私死なないよね？大丈夫だよね？」と聞いていました。また小学六年生の修学旅行で広島の原爆ドームや記念館を観（み）てからは、夜にプロペラ機の音がすると戦争を思い起こし、恐怖心で眠れなくなったこともありました。高校を卒業すると兵庫県の短大に進み、卒業後は大阪の私立医科大学の事務職につきました。

ある日、職場の同僚の家に遊びに行き、そこのお母様に気に入られ、お兄さんと付き合うようになって結婚話が進みました。ところが、それまで私のわがままをほぼ何でも聞いてくれた家族から、この結婚に大反対を受けました。商売第一主義の相手の家は、甘えて育った私には無理だ、というのが理由だったことを後で知りました。しかし私は意地になり、北里重信（きたざと　しげのぶ）さんと結婚しました。

結婚するとすぐに私は、商売第一の家族が経営する店で、二年間一日も休まず無給で早朝から遅くまで働きました。また早朝から働くのに便利だからと、店の二階の何もない物置のようなところで寝泊りをしました。

その後、自分の意志でなく夫の意志でアメリカに渡ると、苦手な英語で苦労しながらも病院の受付で働きました。また知り合いも家族もいないアメリカで、夫は朝から夜中まで仕事で不在の中、だれの手助けもなく二度の出産と子育てをしました。レストランの経営の失敗に無気力になった夫が働かなくなってしまい、生活が苦しかったこともあるなど、それなりの試練を通されました。たくさんの試練の後に離婚しました。

結局、二人の子が一番多感な高校生と中学生の時に、「私も精一杯努力した、もう自分の人生を生きたい」と離婚して、子どもたちにも心の傷を負わせてしまいました。いまさらながら自分の罪深さを恐ろしく思っています。救われてのち、子はイエス様からの預り者だと知りました。

後で知ったことですが、姉の神田啓子と集会の兄弟姉妹がずっと私の救いをイエス様に祈ってくれていたそうです。姉は聖書、福音のテープ、「光よあれ」、「主は生きておられる」やみことばカード等をニューヨークに送ってくれていました。ニューヨークで開催された喜びの集いにも何度も誘ってくれ、私は義理で参加しました。しかし試練の中にいたのになぜか、福音を聞いても、何も入ってきませんでした。かた

くなで自己中心の私は、自力で試練から脱出できるから放っておいて欲しい、と言っていました。

私はイエス様を知る機会がありながら、イエス様の前に膝をかがめることのできない、うなじの強(こわ)いものでした。

この幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。　（2コリント　5・4）

離婚の後、現在の夫である板垣知夫と再婚しました。離婚にあたって息子は「父親は精神的に弱いので父親と一緒にいる」と言いました。自分では、夫と夫の家族には充分につくした、子どもの面倒も一人でやるだけの努力はした、もう自分の人生を生きたい、との思いで家を出たのですが、子どもにそれを言わせた自分の罪の深さを痛感しています。

二〇〇一年の九月十一日の同時多発テロ事件で、人生に大きな転機が訪れました。私は毎朝、飛行機が突っ込んだワールドトレードセンターの地下にある地下鉄の駅を利用していました。ところがあの日に限って娘の学校に行く必要ができ、半日休みをもらっていたので、惨事に巻き込まれずにすみました。しかし大手の旅行社で働いていた主人は、お客の激減で仕事をなくしてしまいました。時を同じくして娘が統合失調症を発病しました。だんだん症状が悪化し、とうとう入院してとても強い薬を何種類も服用させられ、退院してきた時には、目はガラス玉のようで別人のようになっていました。

新天地をもとめてロサンゼルスに引越し、病気の娘も引きとりました。娘の病気をどうにか助けたいと必死でした。病院をまわり、薬を試すたびに詳細な日記をつけました。それを持って医者に意見を言い、どうにか治る道はないかと一生懸命でした。しかし娘はロサンゼルスでも再度入院、もう自分の力

ではどうしようもなくなってお手上げでした。自分の無力さをいやというほど味わいました。どうしていいかわからないところまで追い込まれました。

その時、姉の神田啓子から、今度ロサンゼルスの喜びの集いがあるので会いたい、との連絡がありました。内心、またかと重い心をかかえてホテルに行きました。ところがロビーに迎えにきた姉の顔を見たときから、いつもと違う何かが働いているように感じました。ベック兄とお交わりをしたらと言われ、どうしてだったのか自分ではわかりませんが、素直に従うことができました。ベック兄にお会いし、「輝子のせいじゃないよ。すべてがイエス様からだよ」と言われると涙がとまらなくなり、一緒に祈ることができました。イエス様は神様なのに私の罪を贖うために人間と同じ姿でこの世に生まれてきてくださり、多くの苦難の上に十字架に手足を釘（くぎ）づけられ槍で刺し通されて死んでくださったこと、その尊い贖いの血潮で私の罪をすべて清めてくださったことを知ることができました。肩の荷がおり、今まで味わったことのない平安が訪れました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。　（マタイ　11・28）

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださっ

たその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。（エペソ　2・1～5）

自分のかたくなさの故だと知りつつ、どうしてイエス様はもっと早く私の目を開いてくださらなかったのだろうか？と思った時に、みことばが与えられました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。（伝道者　3・1）

このみことばで、すべてをご存知の主からすべての時が与えられていることを知りました。二〇〇二年のサンフランシスコの喜びの集いで洗礼の証（あかし）をすることができました。二〇〇三年には主人、そして二〇〇七年には娘の玲も洗礼を受けることができました。本当にイエス様に感謝で、朝は日めくりのみことばで始まり、朝夕は日々の光を読み、毎食の祈り、とクリスチャンホームになったことを喜んで生活していました。家族や友人の救いと祈りの課題の祈りも熱心に祈っていました。しかし今考えると、イエス様に娘を治してください、ああしてください、こうして欲しいです、とか、自分の願いをかなえて欲しい祈りばかりで、イエス様に委ねて祈る信仰ではなかったことが思い起こされます。また肉の性質は相変わらずで、自分を正しいとして、家族にも自分の考えを押し付けるところのある者でした。

そんなころ主人の犯した罪が明るみにだされ、奈落の底に突き落とされました。一度も主人を疑ったこともなく、まったくそんな様子も主人から感じられませんでした。夜中に目がさめると頭の中で、イエス様どうしてこんなことが現実に起きたのですか？イエス様を信じているので離婚はしたくありません。

赦してやり直したいですがとても苦しいです、と祈り続けました。赦せると思う時は穏やかに接していられるのですが、時に波のように寄せてくる、裏切られたという怒りと不信感でいっぱいになると、本当に苦しくつい口に出して責（せ）めてしまいました。私はイエス様を信じ、イエス様はすべてをご存知で何でもおできになると頭では理解しているのに、それを全面的に確信できていなかったことが示されました。心から祈り、静かにイエス様のなさることは最善と確信して待てばよい、と気づかされました。イエス様が解決してくださいました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ　4・6～7）

私は、心の底から願い祈るようになりました。自我が強く、信仰の弱い私たち二人を強めるためにくださった、夫婦にとっての大きな試練と受け止めることができるようになりました。また、子どもたちも含め、苦しめ傷つけてしまった人たちの傷の痛みをあらためて示されたと思います。私は、これからは主人のことも娘のこともすべてをご支配されるイエス様に委ねます。救われた各々とイエス様との直接の関係で、そこに肉の私の感情は必要ないと理解できました。

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。（ガラテヤ　6・7～8）

たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。

愛は決して絶えることがありません。

（1コリント　13・3〜8）

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

（詩篇　32・5）

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル　13・5）

先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。

（イザヤ　43・18〜19）

こんな私の罪をすべて贖い清めてくださり、試練の時もいつも共にいて導いてくださり、どんなことがあっても捨てないと言われるイエス様の憐れみと尽きぬ愛に、頭を垂れ、ただただ感謝あるのみです。

ほむべきかな。日々、私たちのために、重荷をになわれる主。

（詩篇　68・19）

イエス様に出会ったお陰で、何の悲しみも苦しみもない天の御国で、死後にイエス様といられると思うと、子どもの頃にあんなに恐れていた死は待ち遠しいものとなりました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

このみことばのお約束を確信して、愛する息子の北里勇気（きたざと　ゆうき）、実姉の後長敏子（ごちょう　としこ）と義兄の板垣達也（いたがき　たつや）さんとその家族、北里重信さんや友人の救いを祈っています。

娘の玲は、主にある多くの兄弟姉妹の祈りに支えられていることに本当に感謝しています。弱い者にこそ目をとめてくださるイエス様に委ねて祈り、助けを確信しています。息子は現在日本に住んでいて、時々吉祥寺の日曜礼拝に参加したり、大洗の喜びの集いにも参加しました。また今、私は、イエス様にすべてを明け渡していける者としてください、イエス様を知らない方々にイエス様のことを語れる者としてくださいと祈りつつ、イエス様が迎えに来てくださるご再臨を首を長くして待っています。

板垣輝子（いたがき　てるこ）
出雲市立神門小学校、河南中学校、県立大社高校、武庫川女子短期大学卒業
夫・板垣知夫、息子・北里勇気、娘・北里玲

10人の証し

Unser HERR lebt

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会　10:00 / 18:30

火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



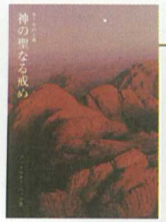
西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ －私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

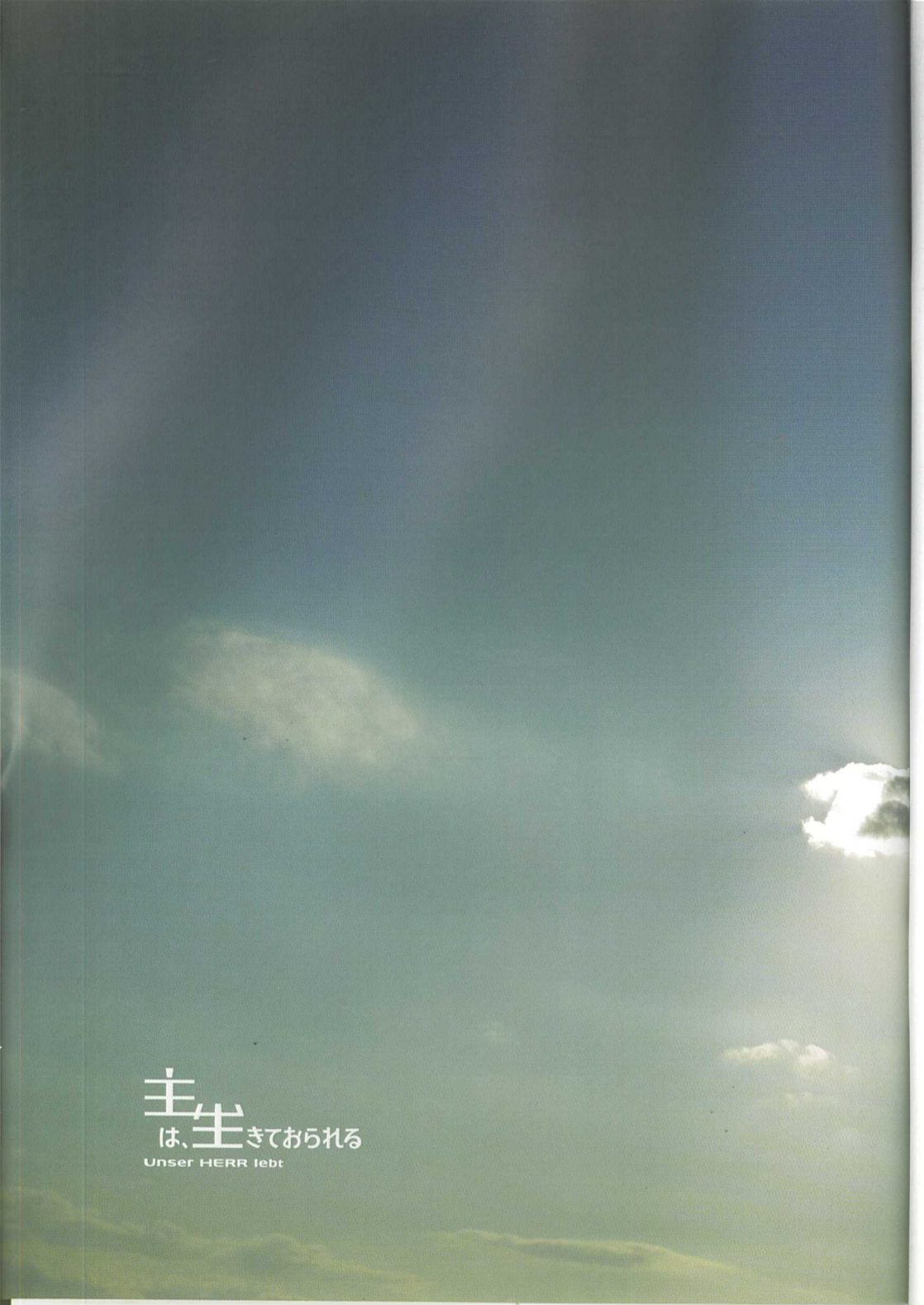
ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第40号

定価100円（税込み）2016年4月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。